久留米市文化財調査報告書　第410集

大木下遺跡

—第1次発掘調査報告—

平成31（2019）年3月
久留米市教育委員会

序

久留米市は古くから水路と陸路の要衝としての位置を占め、筑後地方における政治・経済・文化などの面で発展を遂げてきました。また、それに伴い市内各所に数多くの文化財が残されています。

今回の調査は、久留米市のほぼ中央部に位置する国分町で実施しました。今回の発掘調査とその成果を通して、久留米の歴史と文化財保護に対する理解や普及などに貢献できれば幸いです。

また、今回の発掘調査に際して、土地所有者の原口登栄子様をはじめ、近隣住民の皆様に多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

平成31年3月31日

久留米市教育委員会
教育長　大津　秀明

例 言

1．本書は、宅地造成に先立ち原口登栄子氏の委託を受けて実施した、大木下遺跡第1次調査の発掘調査報告書である。
2．調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の大隈彩未が担当した。
3．遺構実測図の作成は、調査担当者と田中樹子、中村麻衣、藤木幸子、丸山幸、渡辺しげ子が行い、浄書は大隈と当課の長谷川桃子が行った。
4．遺物の実測は大隈と石崎玲子、江口里織が行い、浄書と拓本作成は大隈と長谷川が行った。
5．遺構写真はマミヤ RB67 を用いて撮影した。遺物写真は、久留米市埋蔵文化財センターにおいて、Canon EOS6D Mark Ⅱを用いて大隈・長谷川が撮影した。
6．図面の方位は座標北を示す。基準点の座標は、国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を用いた。なお、平成28年の熊本地震に伴うパラメーター補正は行っていない。
7．遺構表記の略記号は、ＳＫ－土坑、ＳＴ－土壙墓、ＳＸ－その他の遺構を意味する。
8．実測図と観察表、写真図版の遺物番号は全て同一である。
9．出土遺物・図面等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
10．本調査の略記号はＯＫＴ－001、調査番号は201803である。
11．本文の執筆と編集は大隈が行った。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに…… 1
Ⅱ．位置と環境…… 2
Ⅲ．調査の記録…… 5
Ⅳ．総括……18

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

本調査は、宅地造成に伴う事前の発掘調査である。平成 30 年３月８日、土地所有者の原口登栄子氏から久留米市国分町字大木下 722 －３、722 －５における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である大木下遺跡の範囲内にあり、さらには筑後国分寺跡の西側に隣接している。そのため、関連の遺構が残存している可能性があると考えられ、同年３月 15 に試掘調査を行った上で、発掘調査が必要である旨を回答した。同年３月 29 日に代理人を通じて発掘調査の依頼が提出されたため、土地所有者と久留米市長は４月 13 日付で大木下遺跡第１次調査の協定書と委託契約を取り交わした。

現地での発掘調査は４月 23 日に着手し、５月 25 日に終了した。遺物整理と報告書作成は、翌年３月 31 日まで行った。対象面積 718㎡のうち、調査面積は 190㎡である。

２．調査の体制

調査委託者：原口登栄子

調 査 主 体：久留米市教育委員会　　教 育 長：大津　秀明

調 査 総 括：久留米市　市民文化部　　部　　長：松野　誠彦

文化芸術担当部長：宮原　義治

次　　長：西村　信二

文化財保護課　　課　　長：水島　秀雄

課長補佐：久保田由美

課長補佐兼主査：白木　　守

〃　　：丸林　禎彦

主　　査：水原　道範

事務主査：塚本　映子

調査担当：大隈　彩未

整理担当（専任非常勤職員）：米澤美詠子、岩坪　純子

宮崎　彩香、今村　理恵

発掘調査臨時職員

田中　樹子、中村　麻衣、藤木　幸子、二村　智治、丸山　　幸、由布　幸子、渡辺しげ子

渡辺やつ子

発掘調査整理臨時職員

山口由季子

３．調査の目的と経過

今回の調査は、周辺で確認されている筑後国分寺関連遺構の広がりを確認することを目的に実施した。平成30年４月23日、重機で調査区の表土を剥いだ後に遺構検出を行い、遺構の掘り下げを開始した。遺構の掘り下げと並行して、実測や写真撮影などの記録を行い、同年５月22日に高所作業車を用いて調査区全景の撮影を実施した。撮影後、土坑や土壙墓を完掘し、完掘状況の実測や写真撮影を行った。その後、同年５月25日に調査区の埋め戻しと器材の撤収を終えて、現地での発掘調査を終了した。

遺構配置図はトータルステーションを用いて作成し、測量データは株式会社CUBIC製の「遺構くん cubic」で編集・保存した。ただし、土層と一部の遺構については水糸メッシュ法（1/10）で記録した。記録写真は、モノクローム・カラーリバーサルともに６×７判で、マミヤＲＢ68を用いて撮影した。

Ⅱ．位置と環境

久留米市は、筑紫平野のほぼ中央部に立地し、阿蘇外輪山を起点として有明海まで注ぐ筑後川の中流域に位置する。筑後川やその支流によって形成された筑紫平野の南側には耳納山地が東西に連なる。耳納山地の西端には高良山(標高312ｍ)がそびえ、その西側には多くの丘陵が立地している。本調査地は高良山から派生する丘陵の先端部に位置し、標高28ｍを測る。

本調査地付近では縄文時代から近世まで数多くの遺跡が確認されている。

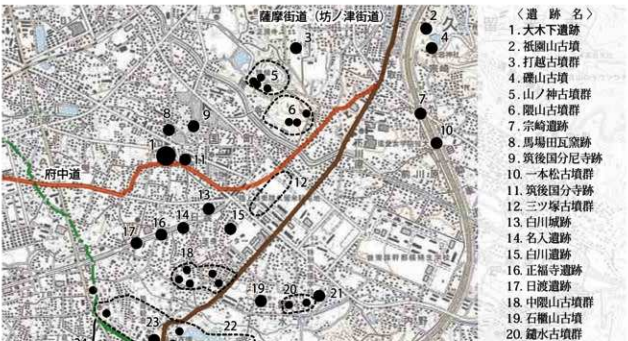
筑後国分寺跡の調査では、寺域の南西部から縄文時代の遺物が認められる。前期の轟Ａ・Ｃ式土器や曽畑式土器、後期の北久根山式土器・西平式土器・三万田式土器が採集されている。白川遺跡からは北久根山式土器が出土しているほか、名入（ないり）遺跡からは中～後期の阿高式系土器や鐘崎式土器、北久根山式土器などが採集されている。正福寺遺跡からは縄文中期～後期の土坑やドングリピットなどが確認され、南福寺式・鐘崎式・北久根山式土器などが出土している。その中でも、第７次調査では谷部分で編組製品や直柄石斧など各種大量の遺物が出土している。

弥生時代には、筑後国分寺跡で中期の竪穴住居が確認されているほか、日渡遺跡で後期の竪穴住居や掘立柱建物が検出されている。

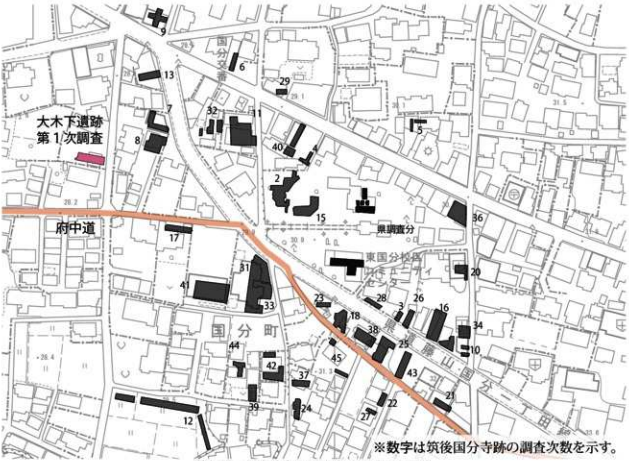
古墳時代になると高良山から派生する丘陵上に前期～後期の古墳が多数認められる。祇園山古墳は高良山西側丘陵上にあり、一辺23～24ｍ、高さ６ｍの方墳で、箱式石棺を主体としており、葺石を２段にわたって巡らしている。墳丘の裾部外周には甕棺墓３基、石蓋土壙墓25基、箱式石棺墓７基、竪穴式石室13基など計62基が伴う。同じ丘陵上にある礫山（つぶてやま）古墳は、滑石片岩を刳り貫いた舟形石棺が４基確認されている。一本松古墳群の調査では、直径15ｍの円墳が確認されている。祇園山古墳から約１㎞離れた山ノ神古墳群では、２基の円墳が調査で確認されており、以前は別に３基の古墳があったという。同丘陵上に位置する隈山古墳群では２基の円墳が確認され、２号墳からは銀製のくちなし玉が14個体出土している。隈山古墳群と高良川を挟んで南向かいに

は、かつて三ツ塚古墳群があったと伝えられる。山ノ神古墳群から南西に約 1.4㎞離れた丘陵上には、中隈山古墳群が所在する。10 数基で構成されていたとされるが、調査では横穴式石室をもつ３基の円墳および１基の古墳が確認されている。東に約 500 mには横口式家形石棺を有し、全長が 100 mを超える前方後円墳の石櫃山古墳が存在したが、現在は削平によって残っていない。鏡水古墳群では箱式石棺や竪穴系小石室、溝が確認されており、５世紀代の所産とされている。石櫃山古墳から南西に約 100 mの位置にある浦山古墳は、全長 60 mの帆立貝式の前方後円墳で、横穴式石室の内部には妻入の横口式家形石棺が納められている。石室内は同心円文帯・直弧文・鍵手文の線刻や赤色顔料が施されている。古墳が多く確認されている一方で、本調査地周辺での古墳時代の集落跡は比較的確認されていない。浦山古墳群の南向かいの丘陵上に位置する平野遺跡では、方形の竪穴建物や大型の掘立柱建物２棟などが検出され、周辺に所在する前方後円墳や古墳群を造営した豪族の存在が想定されている。

７世紀後半に東アジアの政治的緊張が高まると、大宰府に対する有明海側からの防衛のために上津土塁跡が築かれる。上津土塁は明星山から派生した浦山丘陵と本山丘陵を結び、上津荒木川が形成した谷部を塞ぐように構築されている。全長は約 450 mあったとされるが、現在は削平され、約 20 mを残すのみである。天平 13（741）年に国分寺造立の詔が出されると、各国で国分寺が造営された。筑後国分寺は高良山から西側に派生する丘陵の先端に立地する。『続日本紀』天平勝宝八（756）年十二月二十日の条に見られることから、８世紀半ばには主要な伽藍部分が完成して



第１図　遺跡分布図（1/25,000）



第２図　調査地点と周辺地形図（1/2,500）

いたと考える。伽藍配置については、講堂や塔の配置から大官大寺式の伽藍配置が推定されてきたが、推定回廊については関連遺構が検出されていない。

この時期には、藤山道に代わって西海道が整備される。筑後国分寺跡の北側には「尼寺」が変化して出来た「西村」という地名があり、筑後国分尼寺の推定地とされてきた。調査次数が少なく詳細な伽藍配置や寺域などは不明である。馬場田瓦窯跡は、筑後国分寺の講堂から北北西にやや270 mのところで、かつて字名を「瓦塚」と称していた位置に所在する。昭和39年に九州大学考古学研究室によって調査が行われ、窯本体は確認されていないものの、物原から単弁九葉の軒丸瓦が出土したことから、国分寺建立の際に作られた窯だとされている。また、日渡遺跡群の発掘調査では、越州窯系青磁碗や「朝」の印文が鋳出された答紐有孔形の銅印が出土している。

国分寺および国分尼寺は、10世紀以降に律令制度が弱体化していったとされる。本調査地の周辺では、鑓水遺跡で12～13世紀の溝が、白川遺跡では13～15世紀の溝が検出されている。また、白川城は高良山座主家の一族である丹波良運の居城であったとされる。宗崎遺跡でピットや溝、土坑、配石遺構などが確認され、11～12世紀代の時期を示す遺物が確認されている。

近世に入ると、筑後国主田中吉政によって柳川と久留米城下をむすぶ柳河往還が整備されたほか、柳河往還から分岐して御井町で薩摩坊ノ津街道に合流する「府中道」もつくられた。

Ⅲ．調査の記録

１．基本層序（第６図）

本調査地点は調査する以前は個人住宅が建ち、現況は宅地であった。調査区南壁の土層は、全部で３層で覆われている。まず、地表下 0.3 ～ 0.5 mを表土（第１～２層）が覆う。表土の直下には 0.2 ～ 0.3 mの暗褐色土（第３層）の遺物包含層がある。この包含層の直下、地表下 0.5 ～ 0.7 m、標高 27.9 ～ 28.1 mで地山面に至り、遺構面にあたる。地山は、黄褐色シルト質土である。

２．検出遺構

古代の不明遺構１基、中世の土坑７基、土壙墓１基、竪穴遺構１基、多数のピットを検出した。以下、遺構の詳細について述べる。

土坑

ＳＫ５（第４・14 図）

調査区西部にて検出された土坑である。平面は隅丸方形を呈しており、長辺 1.07 m、短辺 0.85 m、深さ 0.20 mを測る。遺構の埋土は褐色を呈する。遺物は、土師器の坏・皿・埦・甕の胴部片、須恵器の甕や壺の細片、瓦器、耀州窯系とみられる青磁壺の細片が出土した。

ＳＫ６（第４・15 図）

調査区東部、先述のＳＫ５から南に0.5mのところで検出された土坑である。長辺1.66m・短辺1.48m、深さ0.48mを測る。隅丸方形を呈し、埋土は褐色土が主体である。出土遺物は土師器の坏や甕の胴部片、瓦、青磁や白磁碗が出土した。土師器の坏は糸切り切断痕跡および板状圧痕が残存している。遺構の西部でピットが後出しているが、遺物の出土が無く、ピットの時期は不明である。

ＳＫ 19（第４・16 図）

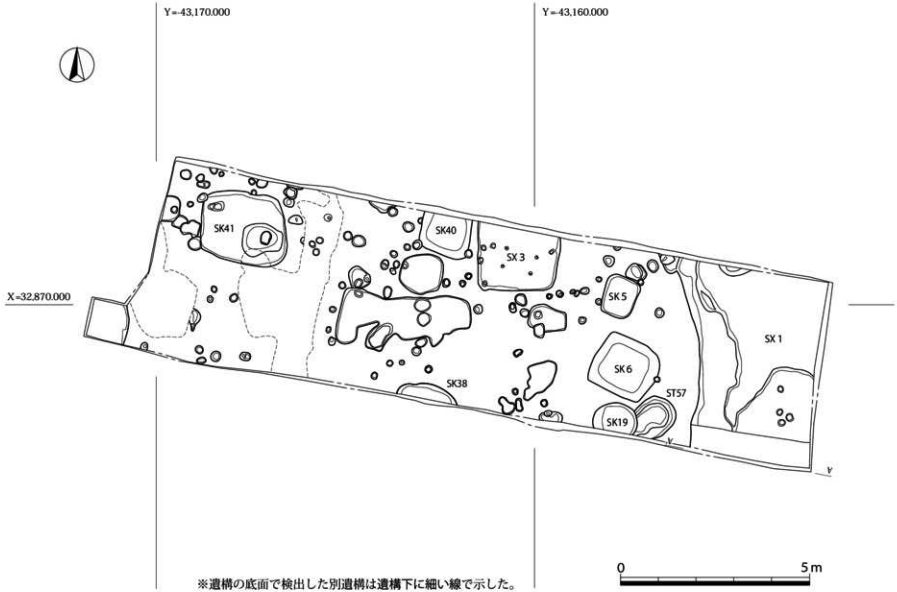
調査区東部南寄りで検出された土坑である。南端は調査区外に伸び、平面はほぼ円形を呈する。直径 1.17 m、深さ 0.35 mを測る。ST57 と重複関係にあり、ST57 に後出する。埋土は、褐色土で占められる。遺物は、土師器の底部を糸切り切断した小皿や須恵器の坏、甕の破片に加えて、平瓦や丸瓦、瓦器、青磁の碗の破片が出土した。

ＳＫ 38（第４・17 図）

調査区中央部南寄りで検出された土坑である。遺構のほとんどが調査区外に広がる。残存部の長さ 1.61 m、幅 0.41 mを測り、深さは 0.33 mである。埋土は、褐色土が主体である。遺物は土師器の坏や埦の破片をはじめ、中世須恵器の甕や鉢の破片、斜格子目タタキの丸瓦、瓦器埦の破片が出土している。

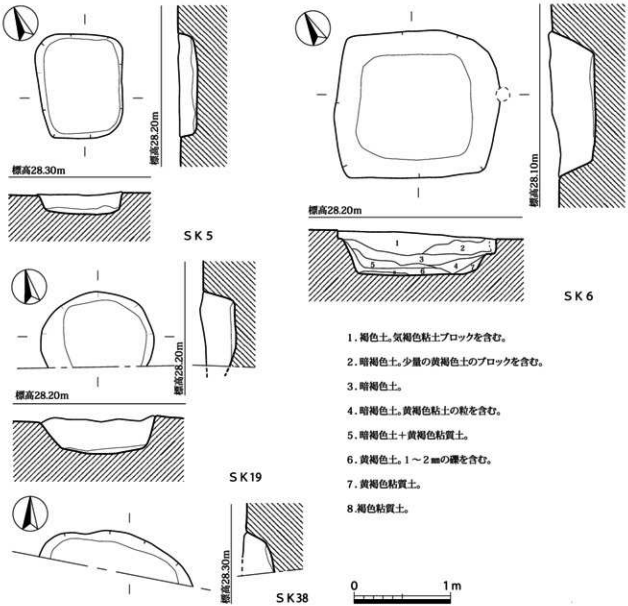
ＳＫ 40（第５・18 図）

調査区中央部北寄りで検出された土坑である。遺構の北端は調査区外に延び、平面は隅丸方形を呈すると想定される。遺構は、長軸 1.36 m、短軸 1.03 m以上、深さ 0.39 mを測る。埋土は、褐色土や黄褐色粘質土、暗褐色土を主とし、土器や炭化物、礫を含む。遺物は、土師器坏や須恵器坏、蓋の破片、甕の胴部片、縄目文タタキや無文の瓦、縄文土器の鉢片（三万田式）が出土している。



※遺構の底面で検出した別遺構は遺構下に細い線で示した。

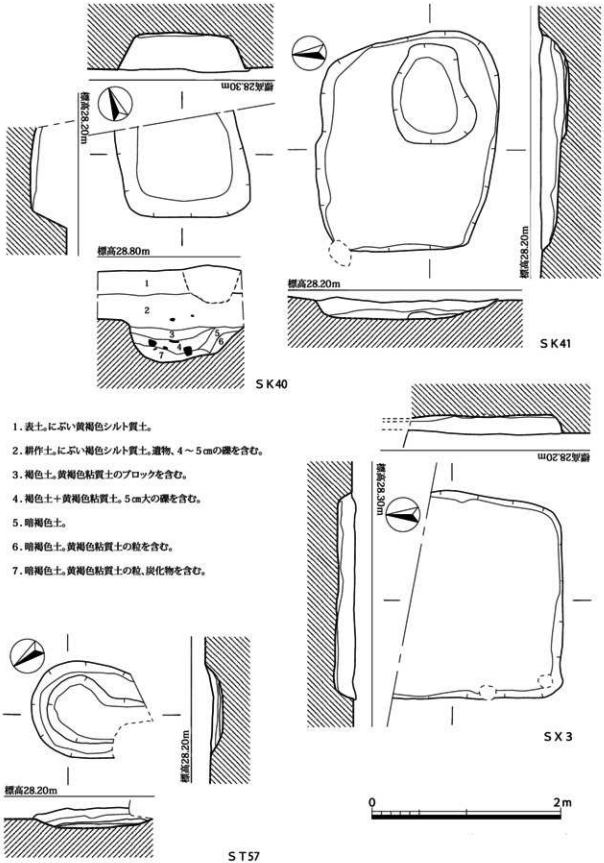
第３図　遺構配置図（1/100）



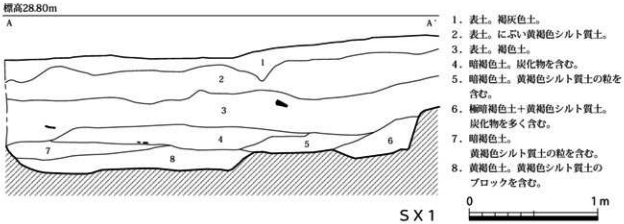
第４図　ＳＫ５・６・19・38 実測図（1/40）

ＳＫ 41（第５・19・20 図）

調査区の北西部で検出された土坑である。遺構の南端上部は近代の撹乱によって削平されているが、撹乱部分の埋土を取り除くと遺構の下部が出現した。平面は隅丸方形であり、遺構の規模は、長さ 2.3 m、幅 1.89 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は褐色土が主体となっており、黄褐色土を含んでいる。特記すべきこととしては、遺構の北東部において土師器の坏や小皿、被熱した石材（片岩）がまとまって出土していることが挙げられる。土師器や石材（片岩）を投げ込んだ際に、土師器の坏が石材に当たって割れたと考えられる状態で出土が確認された。それ以外の遺物としては、須恵器の蓋片や坏を転用した転用硯、斜格子文タタキが施された丸瓦、瓦器の埦片、同安窯系・龍泉窯系の青磁碗の破片が出土している。この遺構の埋没年代は出土遺物から 12 世紀中ごろ～後半期以降と考えられる。



第５図　ＳＫ 40・41・ＳＴ 57・ＳＸ３実測図　(1/40)



第６図　ＳＸ１土層断面図（1/30）

土壙墓

ＳＴ 57（第５・21 図）

調査区東部南端で検出された土壙墓である。南端は調査区外に延び、一部はＳＫ 19 に削平されている。平面形は楕円形を呈すると想定され、長軸 1.0 m以上、幅 1.0 mを測る。深さは 0.08 m と非常に浅い。主軸の方位はＮ－ 44°－Ｅである。埋土は暗褐色土が主体である。遺物は、遺構の北西部の床面から底部を糸切り切断後の板状圧痕が残存する土師器の坏が１点出土している。規模や遺物の出土状況から、土壙墓と考えられる。ＳＫ 19 との重複関係からＳＴ 57 の時期は 12 世紀代におさまると考えられる。

その他の遺構

ＳＸ１（第６・22 図）

調査区西端を南北方向に走る遺構である。遺構の南北端および東端は調査区外へ延びており、規模は長さ 5.0 m以上、幅 4.0 m以上、深さ 0.25 ～ 0.35 mを測る。遺構は、西から東へなだらかに傾斜している。埋土は暗褐色土が主体であり、黄褐色シルト質土や土器、炭化物を含んでいる。遺物は土師器の坏・皿・埦・高坏・甕・甑・移動式カマド等に加え、須恵器の坏・皿・埦・硯・転用硯、瓦、鞴の羽口などが出土している。他の遺構に比べて遺物の種類や出土量が多く、ほとんどが８世紀後半～９世紀前半の特徴を示している。また、瓦器や白磁碗の細片が１点ずつ出土している。

ＳＸ３（第５・23 図）

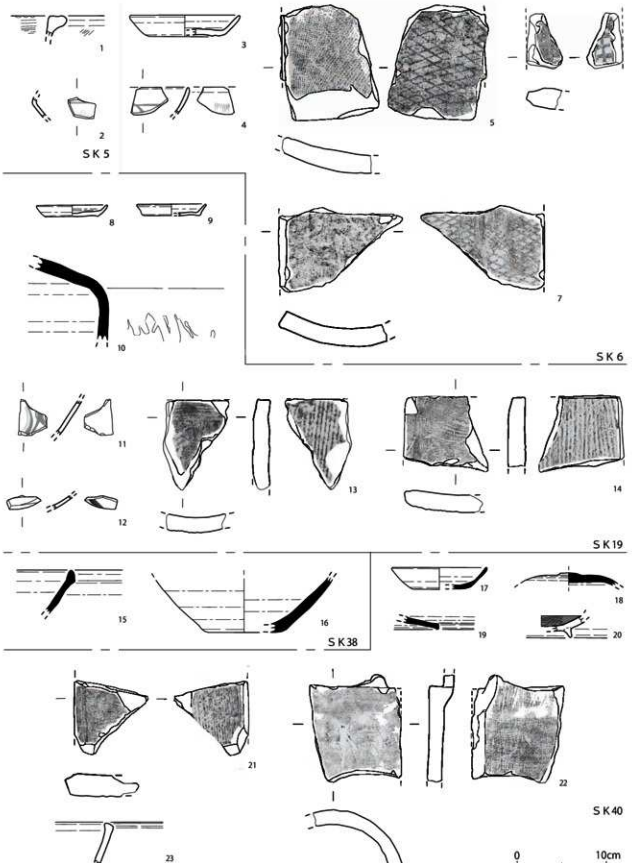
調査区中央部北端で確認された竪穴状遺構である。北端は調査区外へ延びるが、平面形は方形を呈するものと想定される。遺構は一辺 2.2 m、深さ 0.22 mを測る。埋土は、褐色土及び黄褐色粘質土からなる。遺物は、土師器の坏や小皿、甕の胴部片をはじめ、須恵器の蓋の細片、甕の胴部片、正格子文タタキや縄目タタキの平瓦、瓦器の細片、青白磁の合子、石製品が出土した。滑石製石鍋の加工品が出土したことから、遺構の埋没年代は 13 世紀後半以降と考えられる。

3．出土遺物（第7～11・24～27図、第1～3表）

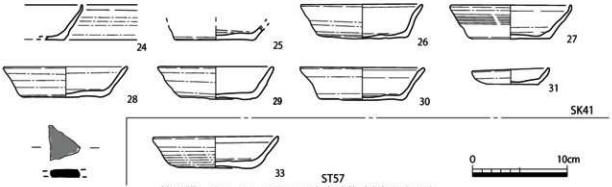
出土遺物の総量はパンコンテナー5箱分である。遺物は古代や中世の土師器をはじめ、須恵器、貿易陶磁器、古瓦、石器、石製品などが出土した。法量や色調など詳細な内容については遺物観察表（第1～3表）を参照されたい。

1・2はSK 5出土遺物である。1は土師器の土鍋で、口縁部には圧痕が施されている。2は青磁壺の頸部片で、外面に草花文を有する。耀州窯系のものと想定される。3～7はSK 6出土遺物である。3は土師器の坏で、内外面ともに摩耗が著しいが、底部を糸切り切断痕跡および板状圧痕が確認できる。4は青磁碗の破片である。5～7は平瓦である。5は凸面に斜格子タタキを施す。凹面にはケズリ調整が残る。側面には分割突帯が残り、破断後は未調整である。6は凸面に正格子タタキを施し、側面は丁寧な面取りがされている。7は凸面に斜格子タタキ後にナデ消しをする。8～14はSK19出土遺物である。8・9は土師器の小皿で、ともに糸切りで底部を切断する。8は糸切り切断および板状圧痕が残る。10は須恵器の壺の肩部で、屈曲が強い。外面に暗オリーブ色の自然釉がかかる。11・12は青磁碗片である。11は龍泉窯系Ⅰ類。12は同安窯系碗で、外面に縦方向の櫛目が見られる。13・14は平瓦である。13は凸面を縄目タタキ後にすり消している。側面は2面で丁寧な面取りがされている。14も凸面が縄目タタキで、凹面は面取りが施される。15・16はSK38出土遺物で、須恵器の鉢である。15は口縁部片で玉縁部分のみ灰色になっている。17～23はSK40出土遺物である。17は土師器の坏である。18・19は須恵器の坏蓋片で、19は口縁部が三角縁で、口縁部両面が灰色に変色している。20は黒色土器A類の椀片である。21は平瓦である。凸面は縄目文タタキが施され、側面は面取りされている。22は有段式の丸瓦である。凸面はスリ消しがされているが、一部布目の痕跡が残る。凹面は布を綴じ合わせた痕跡がある。23は縄文土器の鉢片で、口縁端部には不明瞭な沈線が引かれる。縄文時代後期後葉の三万田式土器とみられる。24～32はSK41出土遺物である。24～30は土師器の坏である。25・27～30の底部は糸切り切断で、25～27・29は板状圧痕を有する。24は口縁が内湾し、口縁端部が肥厚しない。26は口縁が外傾し、内側の端部近くに沈線が施される。27は口縁が外傾し、口縁端部が僅かに内湾する。器厚が比較的薄い。29は歪みがあり、全体的に肥厚する。30は口縁が外傾し、端部の内面には沈線が引かれている。底部には強いナデ調整が施される。31は土師器の小皿である。32は須恵器坏の転用硯で、使用面は光沢を持つ。33はST57出土の土師器坏である。口縁部がやや歪み、底部は糸切り切断痕跡および板状圧痕を有する。

34～82はSX 1出土遺物である。34・35は土師器の坏蓋である。34はボタン状つまみを有する。35は直径20.3㎝と大きく、口縁端部がくの字状である。36～45は土師器坏である。37・39～44の底部はヘラ切りである。36は体部と底部の境界が明瞭で、体部の一部にも回転ヘラケズリが施されている。39は底部のヘラ切りが粗雑である。40は底部から体部にかけて外反し、口縁に向かって膨らみをもって立ち上がる。41は丸みを持つ底部を有する。42は体部の立ち上がりが弱く、口縁が大きく開く。43は内外面に回転ヘラミガキが施される。特に外面の調整は非常に緻密である。



第7図　ＳＫ５・６・19・38・40出土遺物（1/4）



第８図　ＳＫ４１・ＳＴ５７出土遺物実測図（1/4）

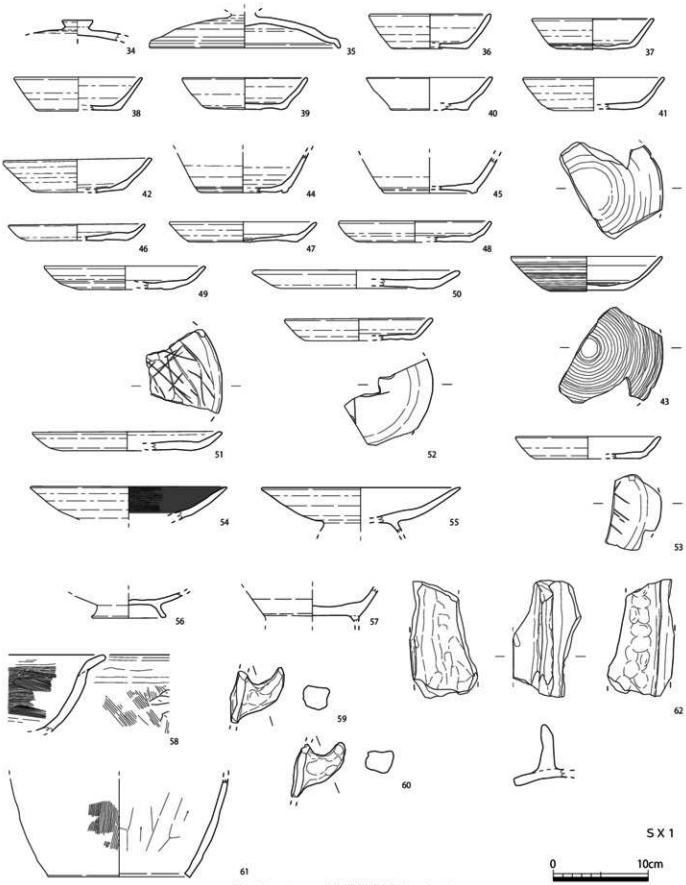
44・45 はケズリ出し高台を有する底部片である。46 ～ 53 は土師器皿である。46 は底部はヘラで切断され、やや丸底気味である。47 は底部から体部にかけて明確に屈曲する。51 は丸みを帯び、内面には線刻が施される。48・52・53 は底部に面取りを有する。52・53 は底部にヘラ記号が残る。54 は黒色土器 A 類皿と思われる。内面のミガキは横方向に丁寧に施される。55 は土師器高坏の坏部片、56 は土師器椀の脚部片である。57 は土師器鉢である。高台接合の為の切込みが施されている。58 は土師器甕である。胴部の張りがなく、鉢に近い形状をしている。59・60 は土師器の把手である。どちらも先端にむかって鋭く突出する。61 は土師器の甑、62 は移動式カマドの破片である。63 は須恵器の坏蓋の口縁片、64 はボタン状つまみを有する須恵器蓋の破片である。65 は須恵器の坏で、高台は若干外側に広がる。66 は須恵器の硯である。圏足円面硯で、体部には断面三角の突帯がまわる。よく使用されており、硯面は光沢をもつ。67 ～ 72 は須恵器の転用硯である。67・68 は蓋を転用し、67 は使用痕がわずかに確認できる。69・70 は坏を、71・72 は甕の胴部片を転用している。73 ～ 78 は瓦である。73 ～ 76 は平瓦で、73 ～ 75 は側面を面取りしている。73 は凸面が正格子タタキが施され、凹面は側面に弱く面取りされている。74 は凸面は縄目のタタキ痕で、二次焼成を受けて赤色化している。75 は凸面を縄目タタキ後にすり消しており、一部に指紋が残る。75・76 は凸面に粘土塊から粘土板を切り離す際の痕跡が残る。77・78 は丸瓦である。77 は有段式で、凹面には布を綴じ合わせた痕跡があり、側面は面取りされている。78 は凹面に粘土塊から粘土板を切り離す際の痕跡が明瞭に残る。79 ～ 82 は鞴の羽口である。79 は被熱による気泡化や灰色化が著しく、82 は被熱による気泡化及び赤色化が見られる。

83 ～ 90 は SX3 出土遺物である。83・84 は土師器坏。83 は底部を糸切り後に板状圧痕を施す。84 は底部の切断が粗雑で、切り残しが残る。85 は須恵器蓋の口縁片、86 は須恵器鉢の口縁部片である。87 は青磁碗の口縁片である。88 は青白磁の合子で、12 世紀中頃～後半を示す。89 は瓦器椀の口縁片である。90 は石製の不明製品である。滑石製の石鍋を転用しており、外面にはススが付着している。計 4 カ所に穿孔を有し、1 カ所の抉り痕跡も残っている。

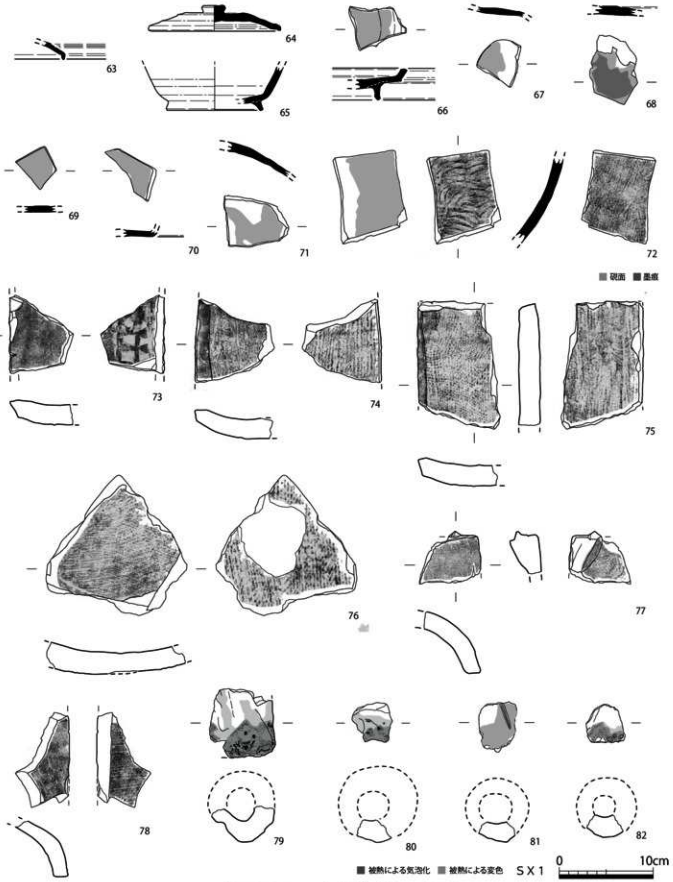
（注）貿易陶磁器の分類は以下の文献に基づいた。

中世土器研究会編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

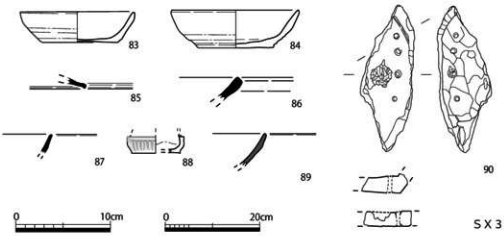
太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財　第 40 集



第９図　ＳＸ１出土遺物実測図１（1/4）



第10図　ＳＸ１出土遺物実測図２（1/4）



第 11 図　ＳＸ３出土遺物実測図（1/4・1/8）

第 1 表　遺物観察表 1

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	外面（施釉）	内面（胎土）	外面	内面			
1	SK 5	土師器	土鍋	－	－	(2.3)	にぶい褐	橙	ハケ目 ヨコナデ ナデ	ハケ目	細砂粒を多く含む		201803 000169
2	SK 5	青磁	壺	－	－	(2.2)	(オリーブ灰)	(灰)	施釉	施釉	精良	龍州窯系か？	201803 000170
3	SK 6	土師器	坏	(12.4)	(7.5)	2.4	橙	橙～黄灰	回転ナデ	回転ナデ	精良	底部糸切り＋板状圧痕 内外面黄褐	201803 000171
4	SK 6	青磁	碗	－	－	(2.8)	(オリーブ灰)	(灰白)	施釉	施釉	ほぼ精良 黒色粒子を含む	同安窯系碗Ⅰ－1b類か。	201803 000191
5	SK 6	瓦	平瓦	(12.9)	(11.3)	2.2	灰黄褐～灰	灰黄褐～灰	斜格子タタキ	布目	ほぼ精良	内面の一部に工具痕あり	201803 000184
6	SK 6	瓦	平瓦	(6.2)	(4.0)	2.2	橙～にぶい橙	灰黄褐	正格子タタキ	布目	ほぼ精良	ヘラ切り	201803 000178
7	SK 6	瓦	平瓦	(9.4)	(13.8)	2.0	灰白～褐灰	灰白～褐灰	斜格子タタキ ナデ消し	布目	ほぼ精良	ヘラ切り	201803 000175
8	SK19	土師器	小皿	[8.0]	[6.0]	1.3	橙	橙	回転ナデ 指オサエ	回転ナデ ナデ	精良	底部糸切り＋板状圧痕	201803 000200
9	SK19	土師器	小皿	[7.8]	[6.5]	1.3	橙～にぶい黄橙	橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良	底部糸切り	201803 000199
10	SK19	須恵器	壺	－	－	(9.0)	暗オリーブ～灰オリーブ	にぶい赤褐～褐灰	不明	回転ナデ ナデ？	砂粒を含む	自然釉がかかる。	201803 000208
11	SK19	青磁	碗	(4.0)	－	－	(灰オリーブ)	(灰オリーブ)	施釉	施釉	精良	龍泉窯系	201803 000206
12	SK19	青磁	碗	(1.6)	－	－	(灰オリーブ)	(灰オリーブ)	施釉	施釉	精良	同安窯系	201803 000205
13	SK19	瓦	平瓦	(10.2)	(7.4)	1.7	灰黄褐	灰黄	縄目タタキ	布目 すり消し	精良	ヘラ切り	201803 000202
14	SK19	瓦	平瓦	(8.4)	(9.4)	2.0	にぶい黄橙～褐灰	黄灰	縄目タタキ	布目	赤色粒子を含む	ヘラ切り	201803 000201
15	SK38	須恵器	鉢	－	－	(4.8)	灰黄～灰	灰黄	回転ナデ	回転ナデ	精良	東播系	201803 000214
16	SK38	須恵器	鉢	－	[9.2]	(6.0)	黄灰	黄灰	回転ナデ	回転ナデ ナデ	精良	東播系 底部ヘラ切り	201803 000215
17	SK40	土師器	坏	[10.6]	[6.5]	(2.4)	にぶい黄橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	雲母を含む	底部ヘラ切り	201803 000218
18	SK40	須恵器	蓋	－	－	(1.3)	黄灰	黄灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	精良		201803 000219
19	SK40	須恵器	蓋	－	－	(1.4)	灰黄褐～褐灰	灰黄褐～褐灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	精良		201803 000220
20	SK40	黒色土器A類	埦	－	－	(2.4)	橙	黒褐	回転ナデ ナデ	ヘラミガキ	黒色粒子・雲母を含む		201803 000230

第２表　遺物観察表２

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	外面（施釉）	内面（胎土）	外面	内面			
21	SK40	瓦	平瓦	(8.2)	(8.3)	2.5	褐灰	にぶい橙	縄目タタキ	布目	精良	ヘラ切り	201803 000222
22	SK40	瓦	丸瓦	(11.9)	(10.2)	(2.5)	灰黄	灰黄	すり消し	布目 ナデ	赤色粒子を含む	ヘラ切り	201803 000228
23	SK40	鞴文土器	鉢	－	－	(4.8)	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒・角閃石を含む		201803 000233
24	SK41	土師器	坏	－	－	(3.7)	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子を含む	底部糸切り	201803 000240
25	SK41	土師器	坏	－	8.7	(1.5)	にぶい橙～にぶい黄橙	にぶい橙～にぶい黄橙	回転ナデ?	回転ナデ ナデ	赤色粒子を含む	底部糸切り＋板状圧痕	201803 000239
26	SK41	土師器	坏	13.0	9.3	3.6	橙～黒褐	橙～灰黄褐	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子を多く含む	底部糸切り＋板状圧痕	201803 000236
27	SK41	土師器	坏	12.9	8.7	3.5	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	赤色粒子を含む	底部糸切り＋板状圧痕	201803 000238
28	SK41	土師器	坏	13.2	9.6	3.2	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子・雲母を含む	底部糸切り	201803 000234
29	SK41	土師器	坏	12.4	7.7	3.4	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子を多く含む	底部糸切り＋板状圧痕	201803 000237
30	SK41	土師器	坏	13.3	9.0	3.4	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	赤色粒子を含む	底部糸切り	201803 000235
31	SK41	土師器	小皿	8.2	5.5	1.5	にぶい橙～にぶい褐	にぶい橙～にぶい褐	回転ナデ	回転ナデ ナデ	赤色粒子・雲母を含む	底部糸切り＋板状圧痕	201803 000241
32	SK41	須恵器	転用硯	－	－	(0.8)	黄灰	黄灰	不明	ヘラケズリ	精良	坏を転用。	201803 000242
33	ST57	土師器	坏	13.4	8.4	3.4	橙～にぶい黄褐	橙～にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	赤色粒子・雲母をわずかに含む	底部糸切り＋板状圧痕	201803 000254
34	SX 1	土師器	蓋	－	－	[2.1]	褐灰～にぶい黄橙	褐灰～にぶい橙	回転ナデ ナデ	ナデ	少量の赤色粒子・白色粒子含む	内外面磨耗著しい	201803 000002
35	SX 1	土師器	蓋	(20.3)	－	(4.5)	橙～にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	赤色粒子を含む	内外面磨耗著しい	201803 000001
36	SX 1	土師器	坏	(12.9)	(8.2)	3.7	にぶい褐～褐灰	にぶい褐～褐灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	少量の白色粒子・雲母を含む	底部ヘラ切り 黒斑あり	201803 000003
37	SX 1	土師器	坏	(13.0)	(9.2)	3.3	橙～黒	にぶい橙～灰褐	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ほぼ精良 雲母をわずかに含む	底部ヘラ切り 口縁部外面に黒斑あり	201803 000005
38	SX 1	土師器	坏	(13.6)	(8.9)	3.5	にぶい橙～にぶい褐	にぶい橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	精良。赤色粒子・雲母をわずかに含む		201803 000006
39	SX 1	土師器	坏	[13.3]	8.8	3.4	橙～にぶい黄褐	橙～にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	細砂粒・粗砂を含む	底部ヘラ切り 外面磨耗著しい	201803 000105
40	SX 1	土師器	坏	(13.3)	(8.3)	3.5	橙～にぶい黄橙	橙～にぶい黄橙	回転ナデ ナデ	回転ナデ	精良 雲母をわずかに含む	底部ヘラ切り	201803 000065
41	SX 1	土師器	坏	(15.0)	(10.0)	3.4	橙～褐灰	橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	ほぼ精良。赤色粒子をわずかに含む	底部ヘラ切り 内外面磨耗著しい	201803 000066
42	SX 1	土師器	坏	15.7	10.0	(3.6)	橙～にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ?	回転ナデ ナデ	赤色粒子を含む	底部ヘラ切り 内外面磨耗著しい 口縁部一部に黒斑あり	201803 000104
43	SX 1	土師器	坏	(16.0)	(7.3)	3.6	橙	橙	回転ヘラケズリ 回転ヘラミガキ ヘラミガキ	回転ナデ 回転ヘラミガキ ナデ	赤色粒子を含む		201803 000121
44	SX 1	土師器	坏	－	高台径 [9.8]	(4.2)	橙	橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	精良。赤色粒子・雲母をわずかに含む	ケズリ出し高台	201803 000009
45	SX 1	土師器	坏	－	高台径 [10.1]	(3.6)	にぶい橙	灰褐	回転ナデ ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ほぼ精良。赤色粒子・雲母をわずかに含む	内外面磨耗著しい ケズリ出し高台	201803 000008
46	SX 1	土師器	皿	(14.4)	(10.5)	1.7	橙	橙	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	赤色粒子を含む	底部ヘラ切り	201803 000067
47	SX 1	土師器	皿	(15.6)	(11.7)	2.1	橙～灰褐	橙～灰褐	回転ナデ	回転ナデ	精良。赤色粒子・雲母をわずかに含む	外面一部にスス付着 ヘラ切り	201803 000019
48	SX 1	土師器	皿	(16.2)	(11.5)	2.2	橙	橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ほぼ精良。赤色粒子・雲母を含む	面取り	201803 000018
49	SX 1	土師器	皿	(17.0)	(11.0)	2.4	にぶい橙～灰黄褐	にぶい橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	不明	微砂粒・赤色粒子を含む		201803 000020
50	SX 1	土師器	皿	(22.0)	(16.1)	1.9	にぶい橙～橙	橙	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	赤色粒子を含む	内外面磨耗著しい	201803 000015
51	SX 1	土師器	皿	(20.0)	(13.7)	2.0	橙～にぶい橙	橙～にぶい橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	ほぼ精良。赤色粒子・雲母を含む	内面にヘラ記号あり	201803 000016
52	SX 1	土師器	皿	[15.6]	[11.0]	2.3	橙～にぶい黄橙	橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	赤色粒子を含む	底部にヘラ記号あり	201803 000106
53	SX 1	土師器	皿	(15.4)	(11.0)	2.3	にぶい黄橙～橙	にぶい橙～灰褐	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	ほぼ精良 赤色粒子を含む	内面の一部にススイ付着 底部にヘラ記号あり 面取りあり	201803 000068
54	SX 1	黒色土器A類	皿ｂ	(20.8)	－	(3.5)	にぶい橙	黒	回転ナデ 回転ヘラケズリ	ミガキ	少量の赤色粒子・わずかに雲母を含む		201803 000026
55	SX 1	土師器	高坏	(21.0)	－	(4.7)	橙	橙	回転ナデ ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ほぼ精良 赤色粒子を含む	内外面磨耗著しい	201803 000070

第３表　遺物観察表３

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	外面（施釉）	内面（胎土）	外面	内面			
56	SX１	土師器	埦	－	高台径 7.9	(2.6)	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ ナデ	回転ナデ	ほぼ精良 赤色粒子を含む	底部ヘラ切り	201803 000069
57	SX１	土師器	鉢	－	－	(3.6)	橙～ にぶい橙	橙～灰褐	回転ナデ ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	精良 赤色粒子・雲母を含む	ヘラケズリ 外面一部に少量のスス付着	201803 000021
58	SX１	土師器	甕	－	－	(8.1)	にぶい赤褐 ～にぶい褐	橙～ にぶい褐	ハケ目 ケズリ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	細砂粒・赤色粒子・雲母・角閃石を含む		201803 000072
59	SX１	土師器	把手	6.2	2.8	2.5	橙～赤橙	橙	オサエナデ	オサエナデ		残存高　5.4ｃｍ	201803 000023
60	SX１	土師器	把手	5.7	2.7	2.3	橙～ にぶい橙	橙～ にぶい橙	オサエナデ ナデ	ナデ ケズリ		残存高　5.5ｃｍ	201803 000022
61	SX１	土師器	甑	(15.1)	－	(10.3)	橙～ にぶい黄褐	橙	ハケ目 ナデ	ヘラケズリ	少量の赤色粒子・白色粒子含む	ヘラ切り	201803 000024
62	SX１	土師器	カマド	－	－	12.3	橙	橙	オサエナデ ナデ ハケ目 ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	赤色粒子・細砂粒を多く含む		201803 000073
63	SX１	須恵器	蓋	－	－	(1.8)	灰褐	灰褐	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	精良		201803 000109
64	SX１	須恵器	蓋	(14.2)	－	2.7	黄灰～ にぶい褐	にぶい褐 ～灰	回転ナデ ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	白色粒子を含む	つまみ径（2.55）ｃｍ	201803 000029
65	SX１	須恵器	坏	－	高台径 (10.4)	(4.7)	灰白～ 黄灰	黄灰	回転ナデ ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	黒色粒子をわずかに含む		201803 000031
66	SX１	須恵器	円面硯	－	－	(3.3)	灰褐～ にぶい黄橙	灰褐	回転ナデ ナデ？ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	精良		201803 000035
67	SX１	須恵器	転用硯	－	－	(1.1)	灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	精良 黒色粒子を含む	坏蓋を転用	201803 000074
68	SX１	須恵器	転用硯	－	－	(1.0)	黄灰	黄灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ	精良	坏蓋を転用 硯面に墨痕あり	201803 000034
69	SX１	須恵器	転用硯	－	－	(1.0)	黄灰	黄灰	回転ヘラケズリ	ナデ	精良	坏を転用 底部ヘラ切り	201803 000033
70	SX１	須恵器	転用硯	－	－	(1.0)	黄灰	黄灰	回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	精良	坏を転用 底部ヘラ切り	201803 000032
71	SX１	須恵器	転用硯	－	－	3.6	にぶい赤褐	褐	格子文タタキ	平行文タタキ	赤色粒子・黒色粒子を含む	甕を転用	201803 000075
72	SX１	須恵器	転用硯	－	－	(9.0)	にぶい赤褐 ～褐灰	褐灰	格子目タタキ ナデ	青海波文タタキ	ほぼ精良	甕を転用	201803 000076
73	SX１	瓦	平瓦	(8.2)	(6.8)	2.2	灰	灰	正格子タタキ	布目	精良	ヘラ切り	201803 000038
74	SX１	瓦	平瓦	(8.8)	(8.5)	2.2	橙～褐灰	橙～褐灰	縄目タタキ 寸り消し	布目	赤色粒子を含む	ヘラ切り	201803 000118
75	SX１	瓦	平瓦	(13.4)	(8.8)	2.2	灰黄	暗灰黄	縄目タタキ 寸り消し	布目	ほぼ精良	ヘラ切り 凸面に指紋あり	201803 000039
76	SX１	瓦	平瓦	(14.9)	(15.0)	2.5	にぶい橙～ にぶい黄褐	にぶい橙～ にぶい黄褐		布目	精良		201803 000079
77	SX１	瓦	丸瓦	(5.6)	(6.5)	1.9	赤褐	赤褐	ナデ消し	布目	精良	ヘラ切り	201803 000089
78	SX１	瓦	丸瓦	(9.6)	(5.6)	1.4	にぶい橙	にぶい橙	ナデ消し	布目 ナデ			201803 000090
79	SX１	土製品	輪羽口	(7.4)	(7.0)	2.3	褐灰～灰	橙～褐	指オサエ？		精良	被熱による気泡化・灰色化が著しい	201803 000113
80	SX１	土製品	輪羽口	(4.2)	(4.3)	2.4	灰～ にぶい黄橙	にぶい黄橙				内外面被熱著しい 被熱による気泡化・灰色化	201803 000115
81	SX１	土製品	輪羽口	(5.4)	(4.0)	2.0	黄灰～ にぶい黄	黄灰～ にぶい黄			精良	被熱による灰色化	201803 000099
82	SX１	土製品	輪羽口	(4.0)	(4.1)	2.1	灰白	明黄褐～ 黄褐			砂粒を含む	被熱による気泡化・赤色化	201803 000114
83	SX３	土師器	坏	12.2	7.9	3.2	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	精良	底部糸切り＋板状圧痕	201803 000166
84	SX３	土師器	坏	(13.6)	8.1	4.0	橙～ にぶい橙	橙～ にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	ほぼ精良 赤色粒子をわずかに含む		201803 000160
85	SX３	須恵器	蓋	－	－	(1.2)	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良		201803 000156
86	SX３	須恵器	鉢	－	－	(2.5)	褐灰～灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良		201803 000162
87	SX３	青磁	碗	－	－	(2.1)	（オリーブ灰）	（灰）	施釉	施釉	精良	龍泉窯系か	201803 000151
88	SX３	青白磁	合子	(6.0)	(5.2)	1.9	（オリーブ灰）	（灰白）	施釉 露胎	一部施釉 露胎 回転ナデ	精良		201803 000150
89	SX３	瓦塔	組片	－	－	(3.4)	灰白～ 灰	灰白～ 灰	回転ナデ	回転ナデ	精良		201803 000159
90	SX３	石製品	石臼	(31.2)	(21.8)	(4.3)	灰～暗灰	灰	回転ナデ			黒石製。石臼側面は４ヶ所に突起。内面に大きな擦痕。外面に／字線あり	201803 000165

Ⅳ. 総　括

今回の調査地は筑後国分寺の寺域の西端に隣接しており、筑後国分寺関連の遺構が残存している可能性があったことから、調査を実施することとなった。今回の調査成果としては、古代の土坑１基、不明遺構１基、中世の土坑７基、土壙墓１基、竪穴状遺構１基、多数のピットを検出した。

遺構の時期について

本調査地で最も先行する遺構はＳＸ１である。出土遺物の土師器坏は底部をヘラ切り切断するほか、ケズリ出し高台を有する、底部にヘラケズリによる面取りを施すという特徴をもち、８世紀後半～９世紀の所産といえる。ＳＫ 40 は出土遺物より古代と考えられるが、判断材料とした遺物が細片であり、詳細な時代決定はできない。その他の遺構は中世の遺構で、出土遺物の年代からＳＫ５は 11 ～ 12 世紀、ＳＫ６・19・38・41 は 12 世紀中頃～後半、ＳＸ３は 12 世紀のものである。ＳＴ 57 はＳＫ 19 との重複関係と出土遺物より 12 世紀と想定される。

ＳＸ１について

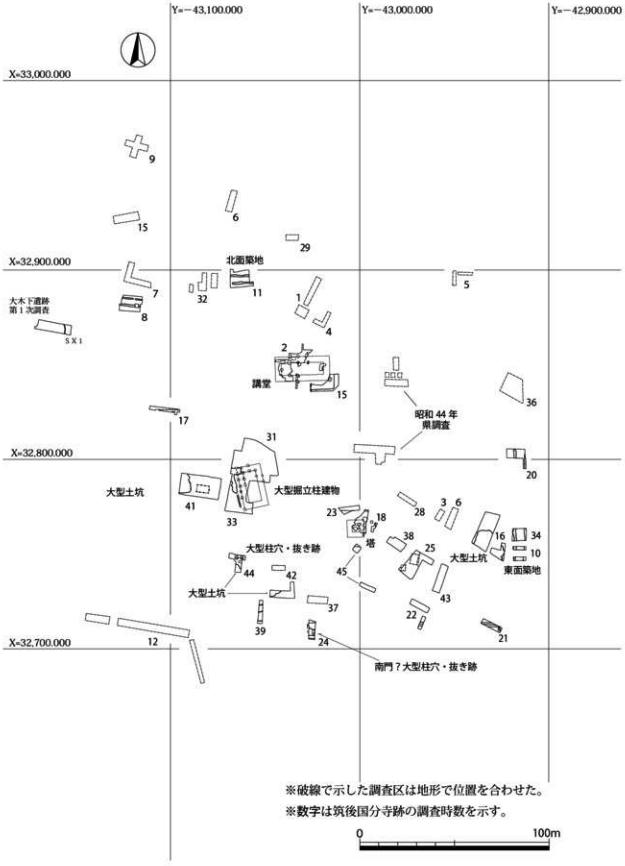
SX １は調査区西端を南北方向に走る溝状の遺構である。今回の調査では溝の西側の上端部分しか検出ができなかったため、全体の形状や規模は不明である。この遺構について検討する際には道路遺構や他の国分寺の関連施設の可能性が想定された。遺構の構造は西側の上端から数段ほど段を成して床面に落ちており、道路遺構で確認されるような硬化面やバラス状の礫がみられなかった。遺物は完形品やそれに近いもの、ある程度の残存がある一方で、ローリングを受けたものが出土している。他の遺構では 12 世紀中頃～後半の遺物が出土しているが、SX １では圧倒的に８世紀後半～９世紀前半の遺物が多い。国分寺全体に注目し、SX １の位置を考えると、筑後国分寺域の中軸を軸として SX １と反対側には国分寺域の東面築地が存在する。東面築地と中軸間の距離は 5.8 mあり、SX １から中軸間の距離よりも１m程度短い。筑後国分寺は伽藍や僧坊・政所などの関連施設、尼寺、またはそれらの造営年代、改築、存続期間、廃絶期間など不明な点も多い。今回検出された SX １も踏まえ、国分寺について再検討が必要である。

中世の遺構について

先述の通り、本調査では中世の遺構が多く検出された。土坑や竪穴状遺構のほか、土壙墓も確認されており、遺物も多様である。過去の筑後国分寺跡の調査でも中世の土師器や青磁、瓦器、陶器が確認されている。大木下遺跡を含めて、周辺においても中世の集落が存在していたと考えられる。

その他の時代について

過去の筑後国分寺跡の調査において、寺域で縄文時代前期・後期～晩期の土器や石器が採集、または出土しており、日渡遺跡群の一部として知られている。そもそも、国分町字大木下は筑後国分寺の寺域とそれ以外の範囲で二分され、寺域以外の大木下地区は周知の埋蔵文化財の「大木下遺跡」とされ、今まで縄文時代の遺跡として日渡遺跡群の一部として周知されてきた。今回の調査でも、ＳＫ 40 から三万田式土器の鉢片が出土しており、縄文時代の遺跡としての関連が示唆される。



第12図　筑後国分寺跡の主要遺構図（1/2,000）

第 13 図　調査区全景（西から）

第 14 図　ＳＫ５完掘状況（東から）

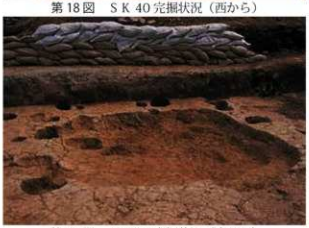
第 15 図　ＳＫ６完掘状況（南から）

第 16 図　ＳＫ 19 完掘状況（北西から）

第 17 図　ＳＫ 38 完掘状況（東から）

第 18 図　ＳＫ 40 完掘状況（西から）

第 19 図　ＳＫ 41 遺物出土状況（西から）

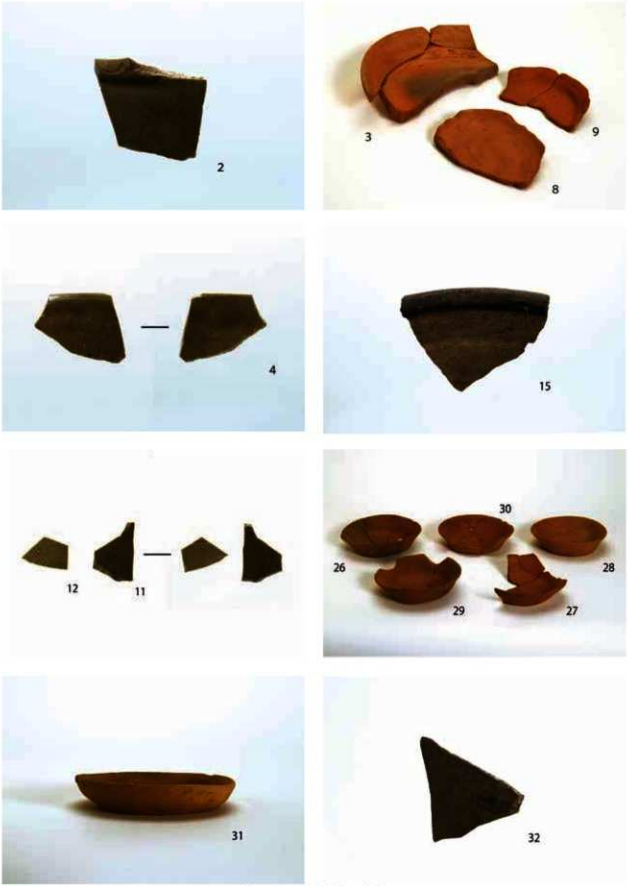


第 20 図　ＳＫ 41 完掘状況（南から）

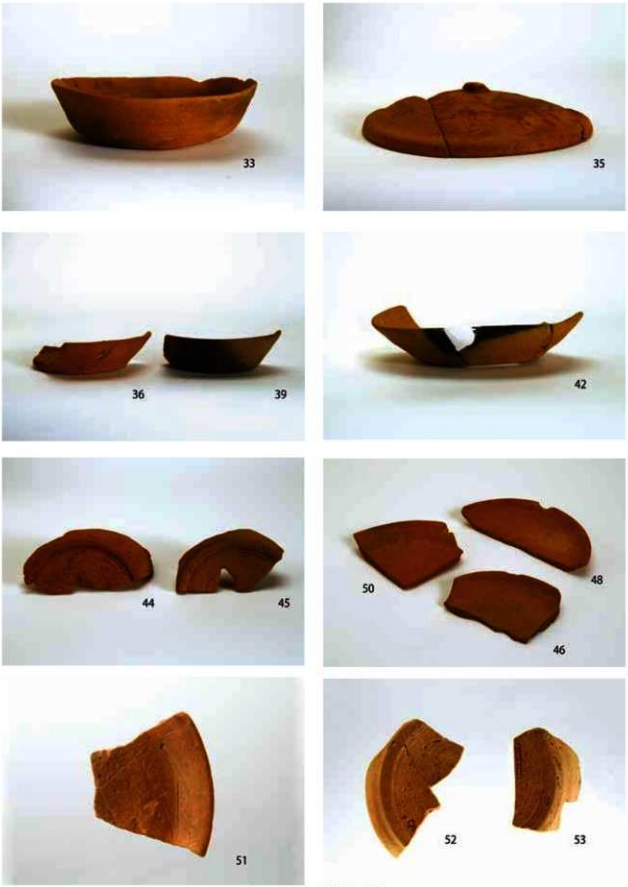
第 21 図　ＳＴ 57 遺物出土状況（西から）

第 22 図　ＳＸ１断面（北から）

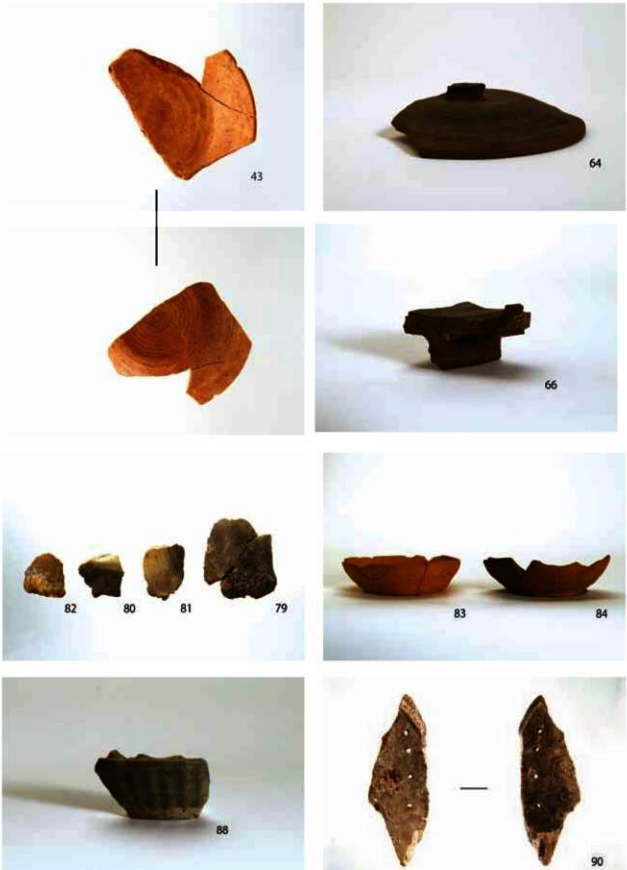
第 23 図　ＳＸ３完掘状況（南から）



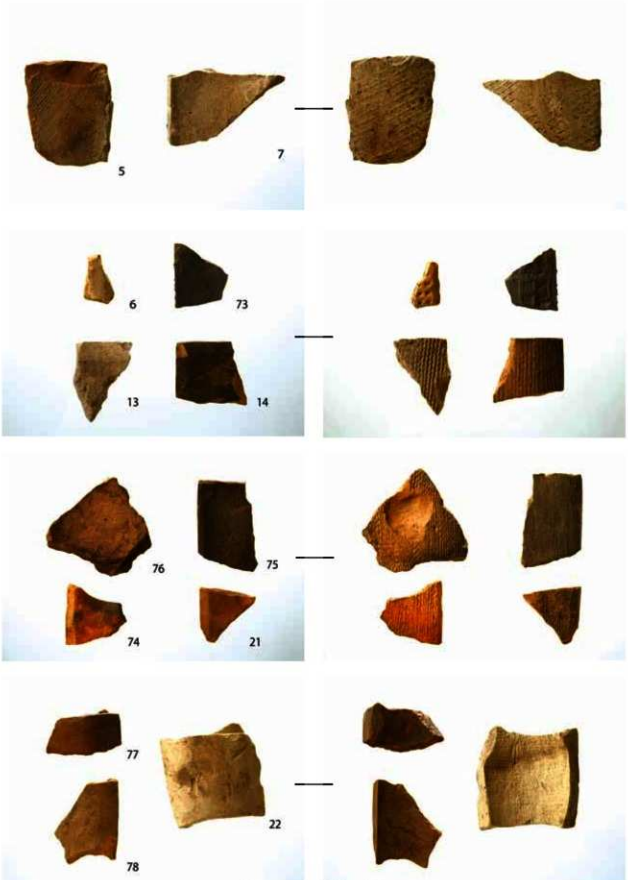
第 24 図　出土遺物写真①



第 25 図　出土遺物写真②



第 26 図　出土遺物写真③



第 27 図　出土遺物写真④

報告書抄録

ふりがな	おおきしたいせき　－だい１じはっくつちょうさほうこく－
書名	大木下遺跡　－第１次発掘調査報告書－
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 410 集
編著者名	大隈　彩未
編集機関	久留米市　市民文化部　文化財保護課
所在地	〒830-8520　福岡県久留米市城南町 15 － 3　TEL：0942 － 30 － 9225　FAX：0942 － 30 － 9714 Email：bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2019（平成 31 年）3 月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大木下遺跡（おおきしたいせき） 第１次調査	福岡県（ふくおかけん）久留米市（くるめし） 国分町（こくぶまち）722-3、722-5	40203	－	33° 17′ 44″	130° 32′ 11″	20180423 ～ 20180525	190㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大木下遺跡 第１次調査	集落	古代 中世	不明遺構　1 基 土坑　1 基 土坑　7 基 土壙墓　1 基 竪穴状遺構　1 基 ピット　多数	土師器、須恵器、貿易陶磁器、古瓦、石器、石製品	筑後国分寺に関連する遺構のほか、中世の遺構も多数検出した。

要　約

今回の調査は、筑後国分寺寺域の西側の隣接地で実施した。大木下遺跡は、現在まで目渡遺跡群の一部で縄文時代の遺跡として周知されてきた。調査では国分寺と同じ時期（８世紀後半～９世紀前半）の溝状遺構を検出したほか、中世の土坑や土壙墓なども確認することができ、今まで不明であった寺域の西側について、様々な情報を得られた。

土木工事の届出日	平成 30 年 3 月 29 日	遺物の発見通知日	平成 30 年 5 月 28 日 （30 文財第 302 号）

大木下遺跡
―第１次発掘調査報告―
久留米市文化財調査報告書　第 410 集
平成 31 年 3 月 31 日
発行　久留米市教育委員会
編集　久留米市市民文化部文化財保護課
印刷　香和印刷株式会社
久留米市津福本町 2320 － 15